

## 屈原賦注について

近藤光男

はしがき

楚辭研究史のうえから見ても、戴震（1723—1777）の「屈原賦注」は、清朝の純乎たる漢學の宗師の手になつたものとして、つねに識者の注目をひく存在である。しかししも、離騷を讀むための訓話として、そのたすけをこれに借りようとすれば、その期待はややもすべしうらぎられる。およそ古代の文字、古代の言語を究めることを、古典研究の出發點と主張した戴震その人の手になる著述であるだけに、これはいかにも理解に苦しむことである。

しかしながら考證の學にうき身をやつしたといわれる清朝の碩儒たちとて、もとより時代の矛盾に感じ、顯門の不誠實とその身の不遇にいきどおる個々の人間そのものに外ならず、戴震またその例に漏れる人ではない。「屈原賦注」はそのような人間戴震を知るためにも大切な手がかりとなる著述であり、自然、戴震の學問の方法を探りかつ批判するには、重要な意味を持つ。わたくしはすでに「清朝經師における科學意識」（日本中國學會報第四）「戴震の考工記圖について」（東方學第十一輯）によつて、戴震の學問、とくにその科學（天文學）及び史學（考古學）に對する意識並びに實踐の跡を調べて、彼の存在がその時代の學問を推進する力として如何なる意義をもつかを明らかにしようとする。本稿はそれを受けて、いわばその文學に對する意識を考え、

生きた人間戴震としての面からその學問のかたちを一層明瞭にすることを目的とする。

もとより屈原研究の歴史としてみても、清朝の學問の所産である戴震の注が如何なるものかを、今日とくに究明しておく必要を感じる。なぜなら清朝の楚辭注として聞える蔣驥の注（康熙五十二年己酉）林雲銘の燈（康熙三十六年己酉）などは、典型的な清朝漢學の學風の所産として擧げるには躊躇せざるを得ないもので、四庫全書にも山帶閣注は著録されたが、林氏の「燈」は存目に列ねられたにすぎない。清朝漢學を背景とする屈原研究としては、さすが戴氏のそれを白眉となすべきことは、衆目の同じく見るところであるにもかかわらず、楚辭研究のうたわれる今日、なおその性格について充分な理解ができているとは思えないからである。

## 一

乾隆四十二年正月十四日、戴震が段玉裁に寄せたてがみによれば、その考工記圖と屈原賦注とは、江南巡撫が四庫全書館に進獻したところ、館の例として現存の人の撰述は録さぬということを取上げられなかつたという。てがみはいま戴東原先生全集（安徽叢書第六期）の卷首に景印された遺墨について見ることが出来る。これによつてもこの二つの著述が當時すでに世の視聽を集めていたことをうかがうに足るの

であり、また戴氏自らも餘程の自信をもつていたであろうことは想像に難くないが、いずれも實は弱年の作にかかる。

戴氏が屈賦に注したのは乾隆十七年(1752)三十歳の年に當ることは段玉裁が先生年譜に述べるところである。しかしわれわれにはまだほかに多くの資料が残されている。その中で誰しもまず注意をひかれる事實は、この年、戴氏の生計はほとんど食物を買うにもこと缺くありさま、そのうえ休寧の地方は旱魃のために米の價はあがる一方、幾月もわずかに麵をすすつて暮したその時に、戸をとじて書きあげたのが、この屈原賦注であるという。夫人朱氏を娶つたのはこの前年のようである。しかも親戚のものが祖先からの墳墓の地を侵しはじめたのを訴訟にもちこんだところ、敗訴になつたばかりか、かえつて罪をかむせられそうになり、やがて都へ重い足を運ぶ(「乾隆十九年」)。「困しい生計をささえた夫人の苦勞は二十餘年に及んだが、中でも戴氏が屈原賦注をつくりあげた頃こそは……」と、段玉裁は朱夫人八十の壽をことほぐに當つて追憶を新たにしている(經韻樓集八)。

勞苦倦極しては天を呼び、疾痛慘怛しては父母を呼ぶとは、ほかならぬ屈原のために傳を立てた司馬遷のことばであつたが、いま清朝の學問に生み出され、またそれを育てた筈にみる理論家戴震、その生涯を通じて一篇の詩をも残さなかつた戴震に、異彩を放つ屈原賦注という著述があることはかくて怪しむに足りない。はからずも世の人間の不誠實に打ちひしがれたとき、混濁の世に生きゆく道のけわしさを知るとともに、純情な人格に魂のより處を求めては、ひとみな屈原に思ひ至るのであろうか、王逸も、朱子も、そしてこの戴震、およそ屈原の作品に冷靜な注釋をすすめた人々が、實はみななにか世の矛盾へのいきどおり、ないしは人間そのものへの不信、人間の運命に對する疑惑を、深く胸に秘めていたこと、少くともそれが著述の動機の一部をなすと考えられる事實は、注目するに價しよう。

戴震の師、江永の、近思錄集註に附された考訂朱子世家を見ると、

寧宗の慶元元年(1151)「是歲楚詞集注成」に注して「寓憂時感憤之意」といふ。紹熙五年(1135)朱熹は時事を憂えてあえて寧宗の經筵に入つたが、清士はすでに朝に乏しく、いたずらに佞人の戲笑を受け、在朝わずか四十六日にして去つた。明けて慶元元年の春、僞學の禁はもとより、黨人の追求はいよいよ急で、丞相の趙汝愚は罷免された。朱熹は上書を決意し、姦邪が主を蔽う罪を極言したが、朱子の身を案じる門人たちは禍の及ぶことをもつて諫めたので、ついにこれを著に問えば、遯の同人に之くに遇い、朱熹は默然として奏稿を火に投じたといふ。その頃「時勢を憂える心がしばしば色に現れるのであつたが、突然ある日、自ら注釋を加えた楚辭一篇をとり出して門弟たちに示した」(門人楊梅の跋、王憲斌の朱子年譜考異に引くによる)といふから、朱熹集註の成つた動機はあまりにも明らかである。(遯つて王逸のばあいは、資料に乏しい。しかし後漢書本傳「文苑」の注に引く張華の博物志によれば、王逸の子の延壽は、父とともに泰山に遊び、魯に行つてかの靈光殿賦を作つたが、歸途、湘水を渡つたとき溺死した。時に年二十。この優れた子息をほかならぬ湘水に沈めて、單身郷里の宜城——これも楚の舊都であつたが——に歸りついたのである父の逸の、悲痛な心境は想像に餘りある)。

すでに楚辭がふつうに文學の對象として扱われる古典なのであるが、文學が人間の内面的な魂を深めゆく過程として考えうるものならば、これらの人々の研究は、少くともその動機から見ても、文學活動へつながる可能性を充分に備えていると言えよう。王逸は書物としての楚辭を整えてなお飽足らずして「九思」を賦し、朱熹は「後語」「辯證」を附した。内面の精神の激しきにもかかわらず、いずれも古典注釋といふかたちをとる以上、これが激情の露呈した姿にほかならない。戴震のばあいはどうか? しかしわたくしはここにまず、戴氏が屈原賦をとりあげるについては、極めて冷靜な學的意識がはたらいて

いることから考察を始めたいと思う。

## 二

およそ戴震はその研究の對象として、古來「經」そのものとの意識されてゐるような古典は、必しもまつ先に取上げなかつた。この點がすでに吳郡の惠氏の學問の性格とかなり異なる點であると思うが、戴氏の着眼はいわゆる「經に亞ぐもの」、つまり第二次的な古典で、實はきわめて有意義なものでありながら、從來、人があまり手をつけなかつた書物にむけられた。考工記をとりあげ、一貫した數理を用いて圖解を試みたのもそれであるが、程瑤田が親しく聞いたところでは、ひごろ大戴禮・水經注・楊氏方言、この三つの書物はどれもあまり研究した人がない本だと云つていたという。程瑤田 (Yen-shih) が戴震を知つたのは乾隆十四年、そのとき程氏は戴震から校定した大戴禮を見せられて敬服し、乾隆十七年には姉婿汪松岑の親戚、在湘 (汪梧鳳の字) が、戴震を招いて子どもに學問を教へてもらつたりしてゐるので、親しくその説を聞くことが多かつた。いましばらく彼が五友記 (通藝錄、修辭餘鈔) にその次第を記すところによつて戴氏のことをとり出してみよう。

水經注は大戴禮同様あまり人が手をつけなない本で、經注が入り交つてしまい、字句の誤脱の多いことは大戴禮とかわりがない。方言は古學を修めるものにとつて爾雅・說文に匹敵するものである。ところがその文章は古拙であり、轉寫の誤りも多く、人には手の施しようがない。

戴氏はやがて方言には自ら疏證を書き、水經注・大戴禮のはちに四庫館に入つてそれぞれその校定に當り、また進呈もしたわけであるが、それはすべては早年のこの着眼を實踐したまでである。このように方言をとりあげては爾雅・說文と並ぶ價值をもつ資料であると指摘して

いる戴震が、同様にして屈原賦をも經に亞ぐものとして取りあげるものである。それはなんの經につぐものかといへば、もとより詩經である。世にいわれる離騷經は、かかる戴氏の學的態度からして、當然にとりあげられるべき對象であつた。早年の著述について語る戴氏の次のことばは、彼の著述の意圖をさらによく暗示するものといえよう。

わたくしは考工記に圖を書いたが、それは短時日につくり上げたため、すでにたびたび稿を改めた。ただ句股圖記は専門の學問であるから、知らない人が見ればさつぱり手がつかず、わかる人が見ればなんにも疑問のおこらないものである。ところが屈原賦注は、諸家の注釋態度とは別に、ひそかに表章の旨を寓したので、

これは是非とも上梓したく、しかも他のものより先に出した。程氏も言うように、年若くして多くの著述ができた戴震は、「古人はつねに著述があまり早くできるのを悔んだものだ」といつて、なかなか上梓しようとはしなかつた。考工記圖にかんしてはいささか問題もあつたことであるが、このように著作の發表には慎重であつた戴震にして、屈原賦注にかきつてその上梓を急いだわけは、これにはいささか表章の意を寓したためにほかならないことを、自ら述べてゐるのである。ではなにを表章しようというのか？ その點になると、この程瑤田の記録ではさだかにすることができない。

以上、戴氏が研究の對象として屈原賦に着眼するには、充分にその學的根據が認められること、すなわちこの著が戴氏の單なる一時の感情の所産ではないことをことわりつつも、別に若干の問題を提起して來た。ここにその究明に入るまえに、今日われわれの手もとにある、書物としての屈原賦注の姿を、明らかにしておかねばならない。

## 三

戴震の切なる希望にもかかわらず、この著が上梓されたのは考工記

圖(1775刊)や句股割圖記(1788刊)よりもおかれて、乾隆二十五年(1760)冬、すなわち麵をすりながら筆を執つたというかの乾隆十七年から九年も後になる。それが實は初稿とはすつかり様相を異にしたものとなつてゐることについてはのちにのべる。

屈原賦注七卷通釋二卷增音義三卷 清戴震撰 音義題汪梧鳳撰 乾隆二十五年歙縣汪氏刊本

これが今日ふつうにわれわれの手近にあるこの本の體裁なのである。刊行した歙縣の汪氏とは、戴氏とともに江永(1681—1762)の門に學んだ同邑の友人、汪梧鳳(1726—171字は在湘)である。歙の西溪里の人で、程瑤田との親戚關係もあり、戴氏の生計に何らかの援助の手をさしのべていた形跡のあることは前述のとおりである。乾隆二十六年夏、戴震が友人の盧文弨(1717—95)に寄せたてがみ「再與盧侍講書」(文集三)によれば、前年の冬、戴氏はいちはやく屈原賦注の印本一部を盧氏に送つてゐる。それは、はじめ乾隆二十二年、盧文弨がこの本を見て戴氏のすぐれた識見に感じ、借りて寫しとろうとしてゐるところへ、上梓の計畫ができたと聞いて自ら撰した序を添えて本を返したというゆかりによるにちがいない。いま汪氏刊本の卷頭に冠されてゐるのがその序である(抱經堂文集六)。

ところでなによえかこの本にかぎつて孔繼涵が微波榭に刻した戴氏遺書に重刊されなくて、ただこの汪氏の刊本があるだけであつた。これについては古典研究に理解ある人たちの手で、その傳承が廣められたいものと、段玉裁が希望をのべてゐる(年譜二十五年)。もつとものちには廣雅書局叢書や湖北先正遺書などに收刻されたけれども、それらにまして顯著なできごとは、民國二十五年に安徽叢書第六期に戴東原先生全集として遺著のごとくが景印された時、屈原賦注の初稿本が、はじめて歙縣の許承堯氏によつて紹介されたことである。

この初稿本一冊はまぎれもなく西溪の汪氏不疏園の初寫本である――

屈原賦注について(近藤)

と所藏者の許氏はいう。かの困窮の年に汪梧鳳の子を教えた戴氏が、汪氏の讀書室不疏園に屈原賦注初稿本をとどめたのであろうか。汪氏はそのころ孤介世によるべなかつた江永・戴震二君子を、禮をつくして不疏園に招き飲食供具その欲するところのままとし、また千金をさいて書物をととのえ、好學の士を招いて日夜講習せしめたとは、汪中が「大清故貢生汪君墓志銘」(述學別錄)に言うところである。

いまこれを刻本にくらべてみると、刻本ははなはだ著述としての體制を整えるに努めたものであることがわかる。自然、初稿本に見られる事實が刻本では多く失われている。惜しいことにこの一冊は離騷から天問まで、九章以下は目録にみえるのみである。これには盧文弨の序はなく、刻本に引く紀昀の説などはみえない。刻本には明らかに戴氏が都へ上つてから、もしくは歸つてから手を加えた處がある。稿本と刻本の相違の最も顯著な點は、刻本では音義としてまとめ附録されてゐる箇條の多くが稿本では注そのものの中に散見する。このことは音義三卷は汪梧鳳の撰と題しつつ實は戴氏自ら書いたものであると、段玉裁が注意してゐる(年譜十七年)のを裏付る事實である。稿本ではまた、毎句の末に韻を注記しており、自説のあとに舊説との異同を記してゐるが、刻本になると一切見られない。要するに刻本は清朝の學風の好みに應じた最も清楚端麗な姿に體例を整えられたものである。その著述の本旨を強調するために、また著述の姿を端麗ならしめるために、わかりきつてゐると思われれることはみな削り去つてしまふのが、戴氏のいつもの方針であり、またさういふ態度が當時の學界では尙ばれてゐた(前掲拙論參照)。いま音義三卷を別に設け、脚韻の注記をすべてとり去つてしまつたのも、明らかにこの方針に沿うものである。してみればこの事實がわれわれに語るところは明らかである。戴氏の注の意圖するところは音義にあるのではなくして、屈原賦そのものを表章しようといふところにある。

かくて著述の體裁について考えるうち再び「表章の意圖」という問題が浮び上つて來た。すでに著述の動機からみてもそれが充分豫想できることはわたくしが指摘したところであるが、いましばらく、當時の人々がこの書物を如何に認識していたかについて記述を進めることにしたい。

## 四

戴氏遺書に總序を書いたのは、幼いとき經を戴氏から授けられ、三十五歳の短かい生涯に公羊學で名を成した孔廣森(1732-1808)であつて、それはみごとな駢文でものされ、しかもよく戴氏の著述の一々について、その意圖やその價值を的確に論評している。いま屈原賦注について述べた部分を見ると、次のような文字が並んでいる(儀鄭堂文二)。

於是辨韻之餘、留觀百氏、研音之下、雅愛三閭、以爲姚臺訪女、近窺宛之遺聲、湘水孳芳、續榛苓之逸響、叔師註而未詳、辨招附而不可、核之漢志、名從主人、爲屈原賦注四卷、

ここにはこの文についての注解をはぶき、その主旨を要約すれば、次の四カ條に整理できよう。

1. 屈原賦注は戴氏の音韻研究の餘業として成つたものであること。
2. 楚辭は詩經の遺聲に近く、詩經の遺響を繼ぐものと認識したということ。
3. それにもかかわらず先人の研究は杜撰であつたこと。
4. 戴氏が楚辭の中から屈原の作品のみをとりあげたことは見識があること。

この第二以下の各條についてはのちの論考にまつとして、ここでは第一條の、この著が戴氏の音韻研究の餘業として成つたものとする點に

ついて検討しておこう。

盧文弨もそれについて次のように言っている。

わが友戴東原君は幼い時から聲音文字の學に通じ、それを基礎にして古典の研究にたずさわり、よく古人の心を千年の昔に探つて、すでに多くの本を書かれたが、さらに餘力をもつて屈原賦二十五篇のために注を作つた。

古代言語にかんする研究成果、その學力によつて、正しく古典が讀め、正しく古典を讀むことによつて古人の心を明らかにつかむこと、これは戴震なども日頃みずから提唱した清朝考證學の學的態度であつて、なんら異とするに足らぬ(與是仲明論學書)などを参照。ただ盧文弨もこの屈原賦注は戴氏がそうした學的實踐の餘力をもつて生み出したものと言つている點に注意しよう。

ではいわゆる聲音文字の學はこの著述に如何に影を投じているのか? まず刻本の音義のあとにある、乾隆二十五年、汪榕鳳の跋をみよう。この跋、汪氏の松溪文集にみえず、これまた恐らくは戴震の自作にかかるといわれる。

古人の叶韻の説の誤りは、明の陳第が屈宋古音義を作つて是正した。惜むらくは陳氏は切韻の學に暗く、その説はそのままには受けとれない。そこで一々考訂して本の欄外に書きつけて、はや九年を閲した。それをいま書き出して重複を刪り次第をつけ、陸德明の釋文の體例にならつたのがこの音義である。

という。すなわち卷末に集成された音義は、この意味からすれば、もとより戴氏積年の勞苦の存するところである。しかしいかにも戴震には弱年にして轉語二十章の發明もあり、六書論の著もできたというが、彼の體系的な古韻研究としては「答段若膺論古韻書」(乾隆四十一年、集四)にいわれる「癸巳春」すなわち乾隆三十八年五十一歳にして、かの七類二十部の説を立てた時期をとりあげるべきではないかと

思う。聲類表を作つたのは乾隆四十二年、すなわち戴氏の歿年に當る。従つて屈原賦注は、戴氏がその古韻學說の體系を基礎にして解釋を試みたもの、とは言い難いのである。

戴氏弱年の著述にはつねに江永の學說の影響が著るしい。戴氏の著述の祖型が往々にして江永の著述の中に見出せることさえある。そこで當然に豫想されることは、この屈原賦注などは、江永の古韻學說、たとえば江永の「古韻標準」などと關連がありはしないか、ということである。稿本・刻本ともに一度ならず江永の說を引いているが、中でもわれわれの耳目を驚かせるに足るのは次の條である。離騷（戴氏の第九段）に、

曰勉升降以上下兮、求榘轡之所同、

湯禹嚴而求合兮、擊咎繇而能調、

とみえ、段氏によれば第九部の古合韻になるところがある。その音義を見ると「調」の字を出して次の如くいう。

江慎脩先生古韻標準云、小雅（車亥）、決拾既飲、弓矢既調、射夫既同、助我舉柴、以首句與第四句韻、中二句非韻、猶之民之未戾、職盜爲寇、涼曰不可、覆背善晉（大雅桑柔）、戾冒韻、而寇可非韻也、屈子蓋效詩中之韻、古人讀書、不必無偶相涉誤、東方朔七諫、恐架轡之不同、恐操行之不調、則又誤效離騷耳、（句讀・圈點・注記はすべて筆者の附したものである）

これは江永の古韻標準卷一にみえる說を要約したものである。まず「同」と調とは詩經の車亥の詩で韻の如くみえるが、實は韻でない。詩經では桑柔の詩のように首句と第四句とが韻で、中の二句は韻でないばあいがあるのだ」という。それまではよいとして、「そうとは知らない屈原が詩經の韻にならつたつもりで、實は韻でない同・調二字を韻に使つてしまつた。古人とても讀書にさいしてたまたま間違いを犯すことがないではない」というのは、いささか人を驚かすに足る議論

である。古韻研究史の上で、江永↓戴震の段階では「同」と「調」が韻ではなかつた。それにもかかわらず離騷でそれが押韻されているというまざりもない事實を解釋するに當つて、この人たちはそもそも屈原が詩經の韻を研究して、歌を作る時にその音韻體系によつて押韻したと考へていたことが明るみに出たものである。すなわち古人の「讀書の誤り」を指摘したこの文も、實は古人には深い學問があつたという、「古人に對する過度なまでに厚い信頼」が前提となつてゐることを知らねばならない。戴震としては江永のことばを引用したにすぎないわけではあるが、戴震はひごろ「後人の學問は古人の學問より優るものではない」という意見を固持していたとは、歿後、紀昀が余廷燦に寄せたてがみに見えることばであつて（存吾文稿）、こうした一種の篤信が戴氏の學問の前提にあることは注意せねばならない。してみれば戴震がかりに古代言語の研究の對象として屈原の作品をとりあげるとしても、それはこの古人の學問は後世のものが及びえないまでに深いという考へから、古人の言語は常に純正な秩序をもつものという強い信念があつてであらうことは想像に難くない。この著述がまさしく音韻研究の「餘業」として、また古代の言語文字の研究の「餘力」をもつて作られたといわれること、すなわちどちらかといへば言語研究そのものよりも、いわば戴氏自身の文學活動といえなくもないような性格をこの著述にもたせるに至つた原因の一部として、この奇妙な、しかしこの派の人々の間にはかなり一般的な、信念が存在するのである。もつともこの信念はこの人たちの學問追究の推進力ともなり、この人たちの學問にすぐれた方法論をもたせた要因でもあつたと思う。それは戴震の屈原研究に如何に作用したのであろうか？ここで戴氏の自序を見ねばならない。

屈原賦注目錄序

漢藝文志屈原賦二十五篇自離騷迄漁父屈原所著之書是也漢初傳其書不名楚辭故志但列之賦首又稱其作賦以賦有側隱古詩之義至若宋玉已下則不免為辭人之賦非詩人之賦矣余讀屈子書哀其為人私以謂其心至純其學至純其言亦至純二十五篇之書蓋經之亞若習以作賦則如馮亮奔欲蘇隱岐山清江也說楚辭者于名物字義未能取識稍數又不得其所以著書之指今特取屈子書注之書成名曰屈賦從漢志也戴氏學

離騷經

九歌

漢藝文志屈原賦二十五篇自離騷迄漁父屈原所著書是也漢初傳其書不名楚辭故志列之賦首又稱其作賦以賦有側隱古詩之義至如宋玉已下則不免為辭人之賦非詩人之賦矣予讀屈子書久乃得其梗槩私以謂其心至純其學至純其立言指要歸於至純二十五篇之書蓋經之亞說楚辭者既碎義迷難未能考識精核且闕失其所以著書之指今取屈子書注之觸事廣類俾與遺經雅記合致同趣然後瞻涉之士諷誦乎章句可明其學觀其心不受後人皮傳用相眩疑書既彙就名曰屈原賦從漢志也休寧戴震

(稿本)

(刻本)

五

戴氏の自序は稿本・刻本ともに見られる。しかもその文は同じくない。ここに兩者を並べて示すこととする(上掲圖版参照)。これを自序といつてよいと思うが、刻本の序が戴東原集(卷十)に收められた題には、屈原賦目録序となつてゐるので、正しくは九歌や天問の序に對して總目の序ということになる。

稿本にみえる序が書かれたのが恐らく乾隆十七年、戴氏三十歳の時であろう(年譜)。それが二十五年の刊行まで通行本のように改められたわけである。いま通行刻本によつて内容を要約しつつ、稿本との異同のうち見逃してはならぬものを指摘することにしよう。

1 漢志に従つて屈原の作二十五篇のみを研究の對象として取り出す。宋玉以下はたんなる裝飾に走つた作品なので取るに足らない。この點はすでに孔廣森が戴氏のすぐれた見識として指摘したところであり(さきに主旨を要約した第四條)、事實、楚辭という書物として傳つて來た作品の中から、まず屈原の作品と考えられるもののみを取り出すことは、かりにこれを文學研究というにしても、その文獻學的段階における研究態度としていかにも正しい手續である。では宋玉らの作品がなぜとりあげるに値しないか? ということが一つの轉回點となつて、ただちに第二のもつとも重要な問題が展開されてくる。

2 屈原の心が純粹であり、學が純粹であるから、その言がまた至純であつて、その作品はほとんど「經」そのものに接近してゐる。

この段、もし稿本についてみるならば、「われ屈子の書を読みてそのひととなり慕へり」といういかにも端的な表現にはじまる。「慕其爲人」とは、たんに修辭上、司馬遷のいわゆる「想見其人」の故智に倣つたものにはすぎないのであろうか? 少くともこの著述の動機を知

る人からは、たんなる虚飾の文と讀まれる疑いはないであろう。ことにまた、屈原の「心」―「學」―「言」がそれぞれにみな純粹であるという。これも屈原の人がらのすべてが純粹であるということにはちがいないが、それをことばのあやからこのように表現したものというようには、少くとも戴震のばあい、理解してはならない。戴氏はやはり、こころ―學―ことばという次第を考えているのである。では心と言葉との間にある「學」とはなんであるか。およそ人間の言語はつねに思想の内實を完全に表現しうるものではないにせよ、思想は言語をまつて表現されるほかはない。そのときその不完全さをなるべく完全ならしめるもの、少くとも表現の準備として必要である思惟の形式をつくる要素、そういうものが考えられたのではなからうか。戴震のばあい、孟子字義疏證などについて、ややその概念規定に近いものをも見うることはあるが、前章に述べたような古人の學に對する篤信ということを思いあわせれば、戴氏からみれば屈原の言語が爾雅や方言とつねによく合致し、その賦がまさしく詩經の韻をふんでいるという事實、それが屈原の「學の至純」なる姿と認められたものと理解してよからう。

さて戴氏はかくて屈原の作品は聖人の經に接近している―二十五篇の書はけだし經に亞ぐものなり―という。「離騷經」とはすでに王逸の章句にみえるよび名である。戴氏も稿本の卷頭にはその名をとつて題している。この自序のはじめにもそのよび名が使われている。ところが刻本になると自序及び卷首の題字から「經」一字を去り、音義に宋の洪興祖の、「離騷を引く古人のうち經と言へるものなし、けだし後世のひと、その辭を祖述するうち、尊んで經とせしのみ、屈原の意にはあらざるなり」という説を引いている。恐らく始めは、古くから離騷經とよばれているのが自分の意にかなうところから、その名をとつたのであろうが、やがて刊行するときになると、學的態度としては

「經」の字などは刪るのが穩當と考えたためであろう。もつともかりに戴氏が經とよんだとしても、それはもとより祖述し尊んで「經」とよぶような立場と完く同じであるわけではなく、戴氏の學問體系にもとづく價值批判が行われてであることは、すでに第二章以下述べて来たところによつて理解されよう。

ところでこのあと刻本では刪られた三句が、稿本の序には見える。戴氏がここにその思いを述べるのに借りたのは、九章悲回風の句である。

馮崑崙以激霧兮

崑崙に馮りてもつて霧を激ませ

隱岐山以清江

岐山に隱つてもつて江を清めんとするも

憚滄淵之磕磕兮

わきかえるはや瀬の磕磕と右うつにはばかり

聽波聲之洶洶

波たつ聲の洶洶とはげしきを聽く

今もし人あつて屈子の二十五篇にならつて賦をつくらんか、そはこの混濁の世をいくばくなりとも澄ましむるならん。―これが刪られた兩三句の意味するところである。戴氏のこの句は、彼の目にあまる世の佞人どもにたきたきつめたものなのか、それともひろく人の世の矛盾を嘆じたものかは知るよしもないが、しかも清朝という國家機構の下で吐いては大きな誤解を蒙らないとも限らない言辭ではある。刻本には刪られている理由がよくわかるように思えるだけ、この自然な感情の筆端にあふれ出たままの稿本の姿に、人間戴震の存在を身近かに感じることができよう。

かくて、屈原の作品はほとんど經に近いということを、讀むものに認めさせたいので、ここに戴氏の筆は轉機を見出し、彼の著述―注―



のもつ意味の説明にうつる。

3 楚辭の注釋家たちはまつたく屈原の本旨を見失つてゐる。自分はこれに注を書いて、屈原のことばにもとづき自分の考えを加えてその精神を顯彰し、古典として端麗な姿に、すなわち經そのものと、その趣きを一致させよう。

四庫全書提要集部楚辭類の叙を見ると、「註釋するもの東漢より宋に至るまでは、たがいに他の足らざる點を補ひつつ、さほど異を立てしことなかりしに、近世に及んで、はじめて異なる解の多くなりゆきて、句を拆きて己が意もて補綴をなし、言ふところ人ごとに殊なり、錯簡說經の術、詞賦に蔓延せり」といふ。そのいわゆる割裂補綴をなすものには、たとえば屈復の楚辭注や天問校正などがあることは提要に明らかであるが、おおむねこれは宋までの研究を是認しつつ、近世、このばあい明清、の注釋態度にあきたらぬ點のあることを指摘するものといえよう。

戴震の注はこの飽き足らぬ點を補うにこそふさわしいものではなかつたらうか。戴震には作者屈原の人格に對する敬慕の情があり、その精神を顯彰するのがこの著述の意圖であつたと言ふも過言ではなからう。屈原賦注を讀むと心なしか戴氏が努めて注釋のための注釋とならぬように配慮しているかみえる。そもそも刊本で訓詁に近い繁瑣な問題は「音義」にとり出して、本文即ち「屈原賦注」はきわめて簡潔な表現になるようにしたのもそれである。極言すれば「音義」は自分の著述に對する注にすぎないのである(第三章參照)。してみれば戴氏の注を用いて難解な離騷の言語に訓詁を與えられることを期待するのは、そもそもこの著述の意圖を見失つてゐるのであり、またもし刊本の「注」(すなわち音義を除いた本文)のみによつて讀むとすれば、それはたとへば戴東原集に收められてゐる句股割圖記を讀むようなもので、單行本には説明の文や圖などがあるのを省いて、まるで骨ぐみだ

けを残したものでないので、それが理解しにくいのはむしろ當然である。

なおいま稿本についてみると、たとえば離騷の「龍虬」「鳳鸞」「高丘」「浦盤」などについて、一應、古人の説をあげるものであるが、いちいち「此等皆不深求」とくりかえし言う。そして刊本になるとそれは完全にとりさらされ、せいぜい音義に簡單な注釋のこされてゐるにすぎない。それらは今日でいへばほとんど古代人の想像の織り成せる動物や地名ではあるが、しかもなおそれらの解釋について調べる必要が學問の領域に充分考えられることである。それを考證の學問がさかんな時代、戴震ともある人が「これらみな必ずしも深く究明せず」と宣言して手をつけないことも、この著述全體の意圖が、その點にはないことを暗示するものと思ふ。

かくて戴震がこの著述の意圖を實現するためにとらうとする基本的な態度は、屈賦二十五篇をまえにして、まず屈原の心、すなわちいわばその作家像をいきなり「純」の一字でとらえ、その至純な學にもとづく表現、すなわち作品の言語そのものがまた至純であると信じ、この點を見逃さずに研究することによつて、これが經そのものと同列におかれるまでにしようということであつた。そして自分がさういふ著述を出すことによつて、「はじめて世の讀書子たちが、屈原の言語に親しみつつ、その學を明かにしその心を見ることができて、後人の淺薄な説に眼をくらまされることがなくなるであらう」といつてゐる。すると第四章でもふれたように考證學者としての戴震の主張、文字の研究↓ことばの理解↓道(經の至極の精神)の究明、という治學の方法はこれと如何なる關係をもつものと理解すればよいのか?

## 六

乾隆十八年といへばちよようど屈原賦注に筆を染めた翌年であるが、戴震は「毛詩補傳序」を撰した。(いま戴東原集卷十に收めるその文末に、

「時乾隆癸酉仲夏」と署しているのによつて知る。

毛詩補傳は今日そのままの姿では見られない。孔廣森の戴氏遺書序に「毛鄭詩考正四卷を作り、別に詩補傳を作りしも成らず、周南召南二卷を成せり」とみえ、また戴氏自ら述べるところによれば「乾隆十七・八年に詩補傳を作つたが完成せず、その中の辨證だけをとり出したのが一帙を成した」という（王涵齋の詩比義述に書いた序、集卷十）。すると今日のこの毛鄭詩考正四卷と吳溪詩經補注二卷とは詩補傳の變身であることがわかる。なお秦蕙田の觀象授時の、たとえば「漏刻星曆」に、詩の鄭風定之方中・國風七月を録した處に、「戴氏震詩補傳曰」としてその説が附されているのは、その片鱗をとどめたものといえる。實は五禮通考のこの部分を擔當した戴氏が自ら録したものであるが、なおついでながら清末に「詩經補注」の稿本が葉德輝のもとに藏されていたことが、翼教叢編（卷六）の「葉吏部與戴宜翹校官書」によつてわかる。

すなわちまさしく屈原賦注と毛詩補傳との筆はほとんど平行して運ばれた。一つは「經に亞ぐもの」であり、他は「經」そのものである。従つて「經」をあつかう毛詩補傳の方はかろがろしく著述として世に出すことをはばかつたものようである。乾隆二十二年のこと、江陰の舜過山に講學をする是仲明、名は鏡という人物が、揚州に立寄つた戴震をたずねて來た。そもそも科學的な學問に志す人たちにとつて、宋明の遺風である講學は好むところではない。そのうえこの人物に戴氏は好感がもてなかつたようである。それでもがまんして、その時、詩補傳序と鄭衛の音を辨じた一條とを出して見せたという。するとその後問もなく是仲明は弟子を使いいたして、詩補傳の稿を借りによこした。戴氏が學問の次第を論じたので有名な「與是仲明論學書」（集卷九）は、その時、「詩補傳はまだ改正を俟つものなのでお渡しできない。それに代えてひとこといわせていただこう」というわけで筆を染めたものなのである。このてがみの中に見えることはふつうに戴氏治學の法として紹介されることが多くて有名になつてはいるが、實はこうし

屈原賦注について（近藤）

た事情のもと、そのような人物に向つて吐かれたことばであることを、われわれは知らねばならない。

ともあれ詩補傳と屈原賦注とは述作の時期からいつても、また對象の性格から見ても、なんらかの關連をもつものといえよう。しかも上梓を急いだ屈原賦注に對して詩補傳はついに著書としての完全な姿をなさないでしまふ事實をあわせて、いよいよ戴氏の屈原賦に對する態度を考ふる資料は豊富になつて來た。ここで毛詩補傳序について見よう。

戴震はまず孔子のいわゆる「思無邪」とは、詩人の心的狀態について言つたもので、決して三百篇を讀む立場について、讀む者の心がその情性を正しくするという意味に解したのは朱熹集註である。そして

わたくしのみそかに考へるところであるが、詩の言語はなかなかわからないものだ。だがひとたび詩人のころをつかむときは、その言語をすつかり自分のものにするところである。ところで、その詩人のころはなおのことわからないわけであるが、ひとたび「思いに邪なし」の一言で斷ち割つてみるなら、そのころをすつかり理解することが出来る。（余私謂、時之圃不可知矣、得其志、則可以通乎其詞、作詩者之志、愈不可知矣、斷之以思無邪之一言、則可以通乎其志、）

という。三百篇の研究法に對するこの發言を、屈原賦二十五篇の研究にあてはめてみる時、われわれはただ「思無邪」の一言を「純」の一字に置き換えさえすればよい。「思無邪」といおうと「純」といおうと大して相違はない。古來、詩の解釋が政治倫理と結びついて、詩經にあつてはいわゆる淫詩が、屈原にあつてはいわゆる哀怨の情が、解釋と鑑賞に必ず問題視されて來た、そのような過去をふまえつつ、あえて詩人、騷人の心を「邪なきもの」「純なるもの」と把握すること

に、それらの研究の出発點を置いた戴震の識見は、たしかにわれわれが注目するに値しよう。

ただここで再び前章末尾に提起した問題に當面する。戴氏の學問の出發點は聲音文字の學ではなかつたのか？ ふつうに認識されている戴震の學風からすれば、まず言語に精通することによつて、難解な古典もおのずから正しく讀破できるものだ、とはむしろ言いそうに思える。そうした常識に對して、これは完全に逆である。しかしそれはわれわれにとつてさほど不可解な矛盾ではない。およそ戴震の學問には始めに何か原則を樹てておいてあとは個々の事象に對して演繹的にその說で通すような性格が感ぜられる（前掲拙論參照）。いまここに、いわば文學的性格に富む古典の研究に際して、作家の内の心情を直觀的に把握してかかる態度として、それが極めて端的に表れていることを、むしろ興味深く眺めるにすぎない。

## 七

戴震のそうした研究態度はこの著述の成果の上に如何に反映しているであろうか？ ここでこの著にみえる諸說のうち、舊說に比べて顯著な特色をもつものを紹介しておくことは、また戴氏の學的性格を探る資料を準備することにもなるであろう。

まず戴氏は離騷を十段に區分して段ごとに作者屈原の意境を追求している。これこそ屈原の心を心として筋を一貫させるための作業である。もつとも、段に區切るといふアイデアに近い形式は林雲銘の楚辭燈（康熙三十六年 1697 自序）にも行われているが、その簡條を戴氏に較べてみると、戴氏の文の簡要なものに及ばず、むしろ戴氏の感覺の鋭さを知ることができるように思う。楚辭燈では篇ごとに總論を設けているが、それも四庫提要（存目）では、「その文章に深みがなく、寺子屋の讀本といったところか。（詞旨淺近、蓋鄉塾課蒙之本）」と酷評を與えら

れている。戴震のばあいは屈原の至純な精神を顯彰しようという目標をもつて、まず直觀的な鑑賞の段階に立つのである。しかも離騷のように一連の敘述が展開する作品に對して、簡要な段落區分をつけることは、その目標に近づくのに有效な方法であつた。たとえば次のような説もそういう作品の扱い方の所産として理解できよう。

戴氏の第五段はかの女類が屈原を戒めることばから始るが、舊說では「衆不可戸說兮、……夫何繁獨而不余聽、」を屈原のことばとするに對し、これをふくめてことばまでを女類のことばとする。また第七段の中に

- 1 吾令豐隆乘雲兮、求宓妃之所在、
- 2 解佩纒以結言兮、吾令蹇脩以爲理、
- 3 紛總總其離合兮、忽緯繡其難遷、
- 4 夕歸次于窮石兮、朝濯髮乎滄滌、
- 5 保厥美以驕敖兮、日康娛以淫遊、
- 6 雖信美而無禮兮、來違棄而改求、

があり、古來この宓妃を求めて訪ねゆくこと及びこれに續く有娥の佚女と有虞の二姚のことなどから、例の「好色」とか「侮褻」とかの批難が生れるものになつている。戴氏ははじめからそうした問題に見向きもせず、舊說の如くこれを宓妃その人を求めに行くとは釋かず、宓妃を生んだ土地、そういう土地がらならば今も淑女がいるに違いない、今の淑女に遇おうとてその土地を慕い訪ねゆく(1)と釋くのである。

さていよいよよき媒人（蹇脩を人名とはしない）を介して出かけてみると(2)、障るものたちが集つて來て相手の心もちはこりむすばれたままである(3)。やむなく夕べに窮石に歸り宿り、朝には髪を滄滌に洗いつつ思うに(4)、今日の淑女たちはその美貌をたのんでおごりたかぶり、毎日遊びにふけるばかり(5)、たとえみ

め美わしくとも禮なければ、「いでや棄て去りて改めて求めゆか  
ん」(6)。

これは戴氏の意を汲んで述べてみたにすぎない。舊説の如く驕傲無禮  
なのは宓妃その人ではない。有城有虞についても同様に解き、今の世  
に自分と友となりうる賢人のいないのを悲しむ情を寫したものと考え  
る。屈原賦注に序を贈つた盧文昭も、確かな説としてこの一條を挙げ  
ることを忘れないでいる。戴氏のこの考えに顯著な點は昔と今との對  
比である。戴震の學問を見ると昔から今への發展はとかくおろそかに  
されがちであるが、昔と今との鮮かな對比が形を變えてではあるが彼  
の天文曆算學や古韻學などに部分的な成功をもたらした例がある。こ  
れも古代を理想として古代に人間精神の理想の姿をもとめるとも  
に、後世はつねに古代に及ばないものという考えかた(第四章参照)と  
關連があるのであらう。

このようにして一つづつ解釋上の矛盾を拂い去るのも、戴氏の意圖  
するところの屈原の作品を典雅な姿の經そのものと其の趣きを合致せ  
しめるのに、大きな力となることは言うまでもない。そうした努力が  
より端的に現れているのは、屈原の發言は基本的にはつねにまるく  
おだやかなものであつて君を直接にすることはなどはないという考  
えかたである。舊注ではすべて「楚の君に向つて勳を述べた辭」と釋  
かれた「惟黨人之偷樂兮、路幽昧以險隘、豈予身之憚殃兮、恐皇輿之  
敗績、」において、君が己れを疏んじたのも策謀をなす人物のためで  
あると、そのことばづかいは婉曲を極め、決して一語とて君を讒むも  
のではないのだと、稿本では上欄にまで注記している。古來、楚辭に對  
する攻撃の矢は、多くその言葉が過激に走り、君をさへ讒るといふ點  
にも集中せられたことを思えば、戴氏のこの努力を見逃すわけにゆか  
ない。

次に九歌を見よう。戴震は九歌に別に序を書いて、各篇がそれぞれ

屈原賦注について(近藤)

どういふ時に作られたかを述べている。實は九歌のみならず、楚辭各  
篇についてその作られた時を述べた先例は、これも楚辭燈にみえるの  
であるが、それはまた明の黃文煥の楚辭聽直の説を踏襲したものにす  
ぎないことは、すでに提要に指摘されている。林氏の燈にみえる解説  
の文はいかにも冗漫である。それに對して戴震の簡潔な表現を見てい  
ると、詩經の序を意識し、その體裁に倣つて書いたのではないかとさ  
え想像したくなる。ほかに天問にも序があるにかかわらず、戴東原集  
にも屈原賦注目錄序(すなわち本稿第五章で論じた自序)と並べて九歌の  
序のみが收められているのも、意味なしとしないかも知れない。では  
戴氏が九歌の各篇について、それが作られた時を想定したのは、作品  
解釋と如何なる關連があるのか? そのもつとも顯著な例として、次  
に「東君」の序を挙げよう。

懷王入秦不反、而頃襄繼世、作東君、末言狼狐、秦之占星也、其  
辭有報秦之心焉、

という。それは九歌東君の篇末に、

舉長矢兮射天狼、

長矢を擧げて天狼のほしを射、

操予弧兮反淪降、

わが弧を操りて反つて淪み降りぬ

という句があつて、天狼星(シリウス、大犬座のα星)と弧(大犬座のβ  
星附近の九つの星)とが詠みこまれていたのであるが、いわゆる分野説  
において、秦の地がこの狼・弧の分野に屬すると考えられていたこと  
は、史記天官書によつても確かめることができる。屈原がことさらに  
秦の分野を掌る星をとつてかくの如く歌つたというところから、「東  
君」は楚の懷王が秦に行つたまま歸らず、頃襄王が位を繼いだ時の作  
で、そのことばには秦の國に對する深い復讐の念がこめられている  
と、戴震はいふ。實はこれは作られた時を決定して作品の鑑賞に資し

たと言わんよりは、作品にあらわれた星象によつてその時期を決定し、作者の心を汲んだものであつて、それだけに戴氏の面目躍如たるものあるを感じるのである。

## むすび

「亂世の音は怨みてもつて怒る。亡國の音は哀んでもつて思う」とか。音聲に哀怨の響きのこもるのは世が亂れ國が亡びるによつてであり、哀怨の情に騷人は起る——哀怨起騷人。「ひとたび騷人が起つてより、すなわち楚辭以後というもの、詩の言語は墮落の一途をたどつた。大雅の如く、聖人の理想と合致する正しい言語をすみやかにとりかえさねばならぬ。」——と聲を大にして叫んだのは唐の李白であつた。およそ屈原の賦に對する批評ともいふべきものは、史記屈原傳にもみえる有名な淮南王安のことば、「國風は色を好めど淫せず、小雅は怨み誹れど亂れず、離騷のごときはこれを兼ねたりといふべし」に始まり、漢六朝を通じて評論の歴史ははなばなしく展開される。あるいは好色哀怨の情がよく調和美を失わずに歌いなされているとし、あるいは文學の生活が政治や倫理と結びついては、文辭の放恣怪譎が論ぜられる。ここにそのような認識の歴史を跡づけたうえで、ふたたび戴震が二十五篇を「純」の一言でおさえたその意味について考えなおす必要があると思う。なぜなら、戴震の「純」の一字は、かくも重い認識の歴史をにないつつ、しかもあえて下されたものなのであるから。

それからまた、たとえば漢の王逸の章句、宋の洪興祖の補註、朱熹の集註、明の陳第の屈宋古音義、清朝では蔣氏山帶閣の注や林雲銘の燈、それらを中心とする歴代のおびただしい注釋——研究——はそれぞれが如何なる性格をもち、いかなる關連をもつて展開して來たのか、そういう研究の歴史の流れの中で戴氏注の存在はいかなる意味をもつかについて考えてみたい。

しかしそれはいずれも楚辭の評論史及び研究史が準備できたらうえのことなので、稿を改めるほかはない。本稿はもつぱら戴震の屈原賦注そのものの性格を明らかにするにつとめたものである。

三十歳前後、生計に窮した戴震が、世の混濁に憤り、純情な人格、屈原を思慕したのがこの著述を生む動機として想像できること、それもこの注の傾向を決定する要因ではあつたが、一方、戴震が「經に亞ぐもの」として詩經に對する屈原賦を取り上げることは、禮經に對する大戴禮、爾雅に對する方言、また水經注や考工記など、つねに研究の旨點に入る古典に着眼するという優れた學的態度から出ていることを述べ、さらに孔子が詩人の心を「思無邪」の一言でおさえた如く、戴氏は屈原の心を「純」の一字でとらえて、その言語もまた至純なりとの信念のもとに、自らその作品に注を書くことによつて、これを「經」と同列に置けるものにしようとしたことを明らかにした。これは戴氏のとる學問研究の方法として一般に理解されているところと一見、逆であるかに見える。

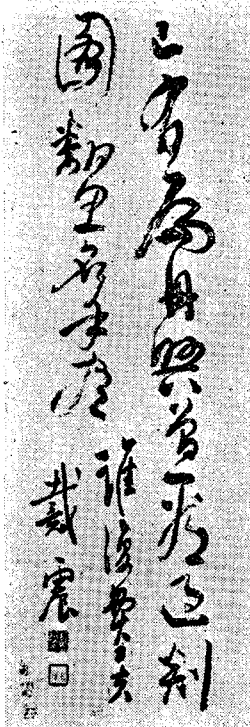
しかし戴震の學問のうち、今日の天文學・考古學などの領域に入る分野について見て、戴震がほとんど歴史的事實に目もくれず、古典の中に眞實そのものを追求して行く姿を、またその學的方法が單なる實證主義にとどまらず、つねに熾烈な法則探求の精神に支えられていることについて、わたくしはすでに別稿をもつて報告している。いま屈原賦注の性格を考えた歸結が、また圖らずも今日でいえば文學研究における彼の態度に、右の學的特質がいかに反映するかを語る結果となつた。すなわちいわば作家研究を意圖して屈原賦に注した戴震は、作家像をとらえるに當つて、まず信頼できる作品のみをとりあげた。ところでその作品に向つて、一語一語の語彙について語彙の集成として文意を見ようとするのとは異り、文章の全體をそのままとして、即ち作品そのものをそのままの姿としてとらえるところに出發點をおいた。今

日のわれわれから見ればこれは作品研究の方法として、文學的に意味深い態度であつたと言えよう。もつともそれが、同時にこの著述を一般に清朝考證學者の所産として期待されるような成果をもたないものとして結實せしめた因由でもあつたわけである。

およそ戴學の本質を掘り下げてゆくと、いつも客觀のヴェニールをかむつた主觀の横溢を見る。ただし少し少くとも戴震に關する限り、それはつねに體系的組織的な思辨を基礎に展開されるので、横溢する主觀はあたかも彼の學問の推進力として働いているかに見える。戴震の學問のかたちにかかる特質を見出すとき、いたずらにかの「實事求是」ということばのみをもつて、清朝漢學の本質を解説するのは、いささか安易に過ぎるという感を抱かざるをえない。少くとも戴震が漢學の代表的人物の一人と見做されるかぎりは、そしてまた事實、戴震の學問がその時代の學問を展開させるうえに大きな存在價值をもつたものと考えられるかぎりは。

本稿も、筆者が清朝學術思想の本質を追求することを目的とし、戴學の性格を探ることによつて、漢學のかたちを把握しようとする、一連の作業の一部をなすものにはかならない。

〔附記〕「生涯を通じて一篇の詩をも残さなかつた戴震」(第一節)と言つたが、歙縣の許承堯氏の藏にかかる戴氏の遺墨には、



とみえる。明らかにこれは、王子猷が雪の夜の興にまかせ、輕舟に乗じて剡溪なる戴安道を訪ねた故事をふまえてはいるが、他になんの資料もなく、いまだ俄かにその意を悟り難い。それにしても果してこれが戴氏の自作であれば、詩、一篇は、残したことになる。安徽叢書的全集、卷首にみえる。

また戴震は二十九歳の暮春に、明の遺明、周容の春酒室集を手抄している(旌徳の呂氏藏のその一葉が國學季刊三ノ一、戴東原專號に景印された)。ひそかにその節を慕つてであつたかも知れないが、少くとも詩を學ぶためではなかつたであらう。ただ若い時には好んで古文を作つた。しかも「制義の文はその道の名家も及ばぬほどで、姚鼐は歸震川の集には經義を附刻すべきだと言つたが、震川や戴先生の經義は、文集に附刻するのが當然だ」と、段玉裁が言う。しかし文章に對する理論が戴氏にはあつた。戴震は、はじめ學問には義理・考核・文章、三つの根源があると考へたが、數年たつて義理こそ考核・文章の根源であると悟つた、と自ら言う。本稿の主旨に關し、示唆に富む發言であると思う。

同郷の友の方矩が、古文の學に力を盡していると聞いて書き送つたてがみ(集九)には、「文章はその大本を得てこそ「道なり、藝にあらず」と言える」と論じ、「僕は難を避けて郷里を離れ、さきに好んで治めた古文の學を久しく棄てている。身の置き處もないこの僕を、古人も憐れに思つてくれよう。何事も體驗して始めて難しさがわかるもの、いづれ古人に及ばぬ身でありながら、古人に憐んでもらうのを期待しているとは!だが古人に縁のないような人にまで憐みを乞うことなどはしないのだ!」と結ぶ。このてがみが乾隆二十年に書かれたものであることから、本稿第一節に参照されてよい。本稿に論じた戴學の性格は、前掲筆者の一連の報告はもとより、戴震の哲學(氣)からも、またその音韻學の立場(聲音)からも説明が可能であると考へている。山井湧「明清時代に於ける氣の哲學」(哲學雜誌)、「賴惟勤」(清朝以前の協韻説)(お茶大紀要8)など参照していただきたい。